

## 花の都

二〇〇四年五月、パリ

「イブラヒム、やはりワインはパリで飲むに限る」

アブドルアジズは、シャトー・ムートン・ロートシルトニ

〇〇一年のテイスティングをするところだった。

傍らのソムリエは、ワインのコルク栓を開けるとその匂いを慎重に嗅ぎ、アブドルアジズの前にそつと置いた。アブドルアジズはそれを一瞥しただけで手に取るうとはしなかった。一流のソムリエに一流のワイン、十分に信頼出来る。

ソムリエは、それを見届けると、緊張しながらその赤ワインをテーブルの上に置かれたワイングラスに少し注ぎ、恐る恐るアブドルアジズの顔色を伺った。離れたところからは、数人のウェイターが緊張してアブドルアジズの所作を見つめている。

アブドルアジズは、グラスをおもむろに取り上げると静か

に数回軽く回し、目をつぶってその香りを嗅いだ。そのしぐさは上品で威厳に満ちている。

そして、グラスを口に運び、静かに少し飲むと、ソムリエの方を向き、微笑みながら、満足げに頷いた。

ソムリエ、ウェイターの顔には笑みが浮かんだ。

ソムリエは、アブドルアジズとイブラヒムのグラスにワインを注ぐと、ボトルをサイドテーブルの上に置き、丁寧に礼してテーブルを離れた。

ウェイターは離れたところから食事の進み具合をじっと見つめている。

「わしはロンドンの屋敷にこのムートン・ロートシルトの二〇〇〇年ものを持っている。名品でな。しかし、残念ながら二〇一二年から二〇五〇年が飲み頃と言われており、今飲むわけには行かんだ」

「大使殿下は、やはり我々とは住む世界が違いますね。確か二〇〇〇年ものは一本二五〇〇ドルを軽く超えると聞いて

いますが・・・」

「イブラヒムも良く知っておるな。隅にはおけんな」

イブラヒムは、駐英サウジ大使アブドルアジズの趣味などの情報は端々まで調べ上げていた。アブドルアジズのご機嫌をとるためには何でもしたし、気に入るようなことを言うようにいつも心掛けていた。

「ところで、殿下、先ほどの店に入ったばかりの時とはウエイターの対応が極端に変わりましたね。最初は、有色人種に対するフランス人特有のあの馬鹿にしたような、見下ろしたような態度でしたが、今は、まるで貴族にでも対応しているように見えます」

アブドルアジズはサウジ・ロイヤルファミリー(王族)の中心人物だった。

サウジのエリートは概ね欧米人にも負けないほど背が高く肌の色は白い。そして、彫の深い顔つきをしている。黒い髪、黒い瞳を除けば、まるで古代ギリシャ、ローマ人のよう

に見栄えが良い。リヤド近郊のナジドを発祥とするサウジのロイヤルファミリーは、とりわけ立派だった。ところが、このアブドルアジズは違った。色は浅黒く、まるで黒人のような風貌だった。

彼の父は航空国防相で次期皇太子と目されているロイヤルファミリー中の最重要人物だったが母がイエメンの下層階級の出身だったのだ。

通常、サウジでは、両親ともにサウジ、それも主流を占める家柄出身でなければ一生うだつが上がらない。アブドルアジズが駐英大使にまで上り詰めることが出来たのは奇跡のようなものだった。それは、彼が飛び抜けて優秀だという証左でもある。

イブラヒムはインド人だった。

インド南部ケララの出身だったが、その容貌、姿態は土着のドラビタ系ではなくアーリア系だった。肌の色はインド人らしく浅黒いものの、背は高く、彫りの深い顔に大きな涼しげな目がキラキラと輝いていた。

黒人風の男とインド人らしい二人が、フランス人しか来ないようなレストランを突然訪れたのだから、ウェイターの初めの対応には止むを得ないところがあった。

「彼等の態度が変わり始めたのは、殿下が席についてフランス語をお喋りになってからでした。最初は驚いたような顔をしていただけでしたが、殿下がワインリスト、メニューをご覧になり、料理のご注文をされるとみるみるうちに畏敬の目になりました。そして、先ほどは、大変な緊張振りです。私は、フランス語が出来ませんので良くわかりませんが、殿下のお喋りになるフランス語には特別の響きでもあったのでしょうか」

これはお世辞ではなかった。アブドルアジズのフランス語は流暢でイブラヒムの耳にも心地よく響いた。

「そうか、イブラヒムにも違いが判るか。わしのフランス語の家庭教師は、ソルボンヌを優秀な成績で卒業した上流階級

出身の女史だった」

「しかも、お前は若いから知らんだろうが、昔のフランスの女優、ジャンヌモローに良く似ていてな。大変魅力的だった。それで一生懸命に勉強をしたもんだから直ぐに話せるようになった」

アブドルアジズはそんな軽口が出るほど上機嫌だった。イブラヒムは直ぐにフランス語を話せるようになったアブドルアジズの語学の才能に舌を巻いていた。

アブドルアジズがパリを訪れる時には、イギリス大使館のお伴、フランス大使館のお付きと常に大勢の人間で移動しなければならなかった。晚餐と言えば、ル・ムールス、リッツなど一流ホテルのレストランか、ル・グラン・ヴェフルといった超高級レストランと決まっていた。

前日もアンドレマルローが良く通ったとか言うレストランに連れて行かれた。そのレストランは料理も一流だったが、エレベーターも広々としていて、薄暗い豪華な装飾の施されたその内部は、まるでアミューズメントパークのそれのように次の世界に期待を持たせるようなものだった。

その期待が裏切られることは無かった。

豪華な内装、調度品に満ちた、宮殿のような部屋で食事をしていると、やがて、静かに天井が開き、座りながら夜空の月や星を満喫できた。

しかし、アブドルアジズはそんな響応が煩わしかった。贅沢な悩みだった

そんな日常を離れて、今日は、イブラヒムを連れて、五年ほど前に来たことのある裏通りの隠れ家的レストランにお忍びでやってきたのだった。

そのレストランは、パリの高級住宅街の一角にあった。道路の脇には、マロニエやプラタナスの街路樹が植えられ、四五階建ての石造りの建物が軒を連ねる。

広い屋根裏を改造した店内からは、窓越しにパリの街並みが望めた。延々と続く家々の屋根、その屋根にはところどころ煙突が見える。

ここなら、アブドルアジズを知るものが訪れることは、まず無い。

「ところで、どうかね、リヤドの生活は」

アブドルアジズは、好物のフォアグラを口に運びながら聞いた。

「殿下の御蔭で快適に過ごさせて頂いております。お手配頂いたファイサリアレジデンスでの生活は何不自由なく最高です。リヤド最高級のアール・ファイサリア・ホテルの直営だけありまして、サービスは格別ですし・・・それに、一年中同じ温度に保たれた大きな室内プール付きのジムがあつて、いつも豪華な雰囲気の中で好きな水泳に興じております」

「それは良かった。そう言えばイブラヒムは、学生時代、水泳の選手だったと言つておつたな。てつきり酒と女と遊びが好きなイブラヒムは、戒律が厳格なりヤドでは悶々として過ごしているのではないかと気をもんでおつた」

「殿下、滅相もございません。殿下もご存知の通り、私は、敬虔なモスレムなんですから」

イブラヒムは茶目つ気たっぷりに応えた。

「そうだったな。ご免、ご免。それでは、敬虔なモスレムに乾杯でもするか」

アブドルアジズは、そう言つと、笑いながらグラスを差し出した。アルコールがご法度のモスレムがワインで乾杯というのは、アブドルアジズの痛烈な皮肉だった。

「毎度、恐れ入ります。殿下とこのように乾杯が出来るのは  
光栄の至りです。それでは、乾杯させていただきます」

「殿下は私の敬虔ぶりを良くご存知で恐れ入ります。確かに、  
プールサイドでくつろいでいる時など今にもグラマーな女  
性が入って来るのではないかと勘違いをすることがありま  
す。そんな時は、ここでは決して男女と一緒にプールに入る  
ことなどないのだと言い聞かせております」

「そうか、そうか、ワツハツハ。何か不便なことがあったら  
遠慮なく言ってくれ。いかようにでもしてやるからな」

イブラヒムはアブドルアジズを本当に有難く思っていた。  
アブドルアジズの口利きでレジデンスに入ったお蔭で、レジ  
デンスは勿論、隣接するアル・ファイサリア・ホテル、ファ  
イサリア・タワー、アル・コザマ・ホテルなどファイサリア  
コンプレックス内では、どこに行っても最高のサービスを受  
けられた。下にも置かぬもてなしで、まるでロイヤルファミ  
リーの一員になったような気分だった。

「有難うございます。それでは、何かありましたら、ご連絡

させて頂きたいと思います。今のところ、アルバタのインド人街などに行きましたり、インド人社会のそれなりの繋がりを生かしましてご心配頂いた「女」にも全く不便は感じておりません」

「そうか、そうか、それは良い。それは良い。何よりだ」

アブドルアジズは上機嫌だった。しかし、イブラヒムは、アブドルアジズの、権力者特有の気紛れな性格を熟知していたので、いつも神経をピリピリと尖らせていた。

テーブルにはいつの間にか、アブドルアジズのお気に入り  
の鴨料理が出されていた。アブドルアジズは、軽快にナイフ  
とフォークを動かし、それを口に運んだ。

顔には満面の笑みを浮かべ至福の時を過ごしているよう  
だった。

「イブラヒム、イブラヒムにはいつも大変な世話になってい  
る。礼を言うぞ。わしは金などに拘ってはいないが、わしの  
銀行口座には、毎月一〇〇万ドル(約一億一〇〇〇万円)を超  
える金額がお前から振り込まれていると聞いておる。共同事

業の出資者としては満足すべき水準だ。ここの晚餐などでお茶を濁してはいけないことは十分に判っておる」

イブラヒムは、アブドルアジズがいつもイスラムの戒律を念頭におきながら言葉を選んで喋っていることに気付いていた。

アブドルアジズは、“出資者”と言ったが、実質的には、収益率を約束された出資者、つまり高い利息が約束された預金者に過ぎなかった。

イスラムでは、利息を禁じている。銀行に預金をしても利息は付かない。同様の考え方で投資に対する収益率を固定することも出来ない。従って、そのままでは株は認められるが債券はご法度になる。西欧流で言う利息ではあっても、利益配分という表現を取らざるを得ない。銀行についても、預金者は銀行と一緒に共同事業を行っているとの考え方をして利息をその事業からの収益配分と考えることになるのだ。

アブドルアジズが出資者と言ったのにはそのような背景があった。

「有難いお言葉です。私も十分に分け前を頂いております。私の方こそ、お礼を言わなければなりません」

事実、イブラヒムモリヤドのこの半年間で既に五〇〇万ドル(約五億五〇〇〇万円)を超える利益を得ていた。

イブラヒムはテキサス大学に留学した秀才で、優秀な成績で理科系の大学院を終えると、一流の投資銀行、アイスマンサクスのニューヨーク本店に勤めた。今は、アブドルアジズに誘われて独立しサウジアラビアのリヤドで金融コンサルタントをしていた。彼のファンドは常に二〇パーセント以上の配当を維持していたので高リターンを求めるサウジの投資家には評判だった。

「ところで、殿下、今日は、一つご提案があるのですが・・・」  
イブラヒムは、身をただし、呼吸を整えると、恐る恐る切り出した。

「改まって、一体何だね」

アブドルアジズは相変わらずの上機嫌でそう聞いた。

「殿下、これからは石油先物の時代です」

イブラヒムは、思い切って切り出した。

急に、アブドルアジズの顔色が変わった。

イブラヒムは、間髪を入れずに説明を続けた。事と次第によつては、アブドルアジズの逆鱗に触れるかもしれないような気がしたからだ。

「世界最大の石油埋蔵量、世界最大の石油会社をお持ちになる殿下にこのようなことを申し上げるのは誠に恐れ多い」と思っております。私には、必ずや“サウジ”のためになるとの強い気持ちがありますのでお許し願いたいと思えます」

アブドルアジズは黙っていた。

イブラヒムは、アブドルアジズの目が一瞬きらっと光ったのを見逃さなかった。

「殿下、イスラムでは先物取引を固く禁じていることは良く判っております。このことで殿下にご迷惑をお掛けすることは一切ありません。殿下の与り知らぬところで、若いトレー

ダーが勝手に進めることなのです」

イブラヒムは必死だった。

「これから原油価格は上昇を続けます。私は、石油専門家ではありませんが確信に近いものがあります。実は、テキサス大学時代に知り合ったブーン・ピキンズという大先輩がいるのですが、彼は、石油生産が間もなくピークを迎えるという“ピークオイル”論者の一人です」、

「ピキンズは、昨年も、世界の石油生産量が一日当たり八二〇〇万バレルを超えることはない」と発言して話題を呼びました。彼は、今後、中国、インドの石油需要が増えるし、需給はタイトで原油価格は上がり、恐らく五〇ドルになると予測しております。三〇ドルに戻ることはないだろうとも言っております。私は、この言葉を信じたいと思っております」、

「それに、私には、ニューヨーク商業取引所(NYMEX)で取引をしているトレーダーの友人がおります。彼は石油専門家ではありませんが、相場についての感はするどいのです。彼は、今や、ロイターにコメントが載ったりするほど有名になりました」

イブラヒムは一気に喋った。

アブドルアジズはおもむろに喋り始めた。

「イブラヒム、実は、この間、わしの屋敷にあのサイモンがやってきてな」

「アイスマンサックスのサイモン・ジユダタートですね」  
ニューヨークからロンドンにある欧州本部に出張で来ていたイブラヒムをアブドルアジズに紹介したのがこのサイモンだった。

「そうだ。お前も良く知つての通り、彼は、スーパーメジャーのロイヤルオイルの出身だ。前から良く来て、わしに石油先物投資を勧めておつた。あやつも、お前と同じようなことを言っておつた。アイスマンは、既に相当の資金を注ぎ込んできたが、これから一段と増やしたいということだ。来年、二〇〇五年には原油価格が一バレル当り一〇五ドルになるなどと言っておつたぞ」

「それは凄いですね。最近原油価格が急上昇して四〇ドル程度になりましたが、それでも彼の言った通りになれば、先物

一枚(二〇〇〇バレル)当たりの利益は六万ドル(約六六〇万円)強です。「これまでのところピキンズの言った通り五〇ドルに向かつて上昇して来ましたが、今また彼に聞けばサイモンと同じことを言ったかもしれません。それで殿下はいかがなされました」

「わしは即座に断った。“お前はイスラムで先物取引を禁じているの知らんのか”とどなりつけてやった」

イブラヒムには、その時の光景が手に取るように判った。アブドルアジズの機嫌を損ねたサイモンは尻尾を丸めて退散したことだろう。

「話は変わるが、イブラヒム、わしはパリが好きでな。特にモンマルトルから夕陽を眺めるのが好きだ。明日は、昼頃ノートルダム寺院の塔に登ってモンマルトルを眺め、夕方にはモンマルトルに行って逆にモンマルトルから夕陽のノートルダム寺院を見てみようかと思っている。良かったらお前も来るか」

イブラヒムはしめたと思った。アブドルアジズの機嫌を損

ねるどころか、お伴まで仰せつかった。石油先物取引を進言して良かったと思った。

「殿下、有難うございます。喜んで一緒にさせていただきます。私もパリは大好きです。フランス人は大嫌いなんですけど……」  
「そうか、そうか、それもわしと同じじゃ。わしもフランス人は大嫌いだ」

アブドルアジズの機嫌は完全に元に戻っていた

「明日、晴れると良いですね」

イブラヒムはついひと言余計なことを言ってしまったがアブドルアジズの上機嫌は変わらなかった。

「馬鹿め、晴れるに決まっておる。晴れなければいかん。そうでなければはるばる霧の都からやってきた甲斐がない。ここは花の都ではないか」

“サウジのために”というイブラヒムの言葉も嬉しかったのだろう。サウジアラビアという国名はサウド家のアラビアという意味で、サウジのためということとは、即ち、サウド家

のためということの意味していた。

「イブラヒム、夕焼けを見た後は、美味しいフルコースを食べてその後お前の好きな“クレージーホース”にでも連れて行ってあげるぞ」

アブドルアジズは飽くまで上機嫌だった。

「光荣です。殿下」

イブラヒムは雲の上に乗ったような幸せな気分だった。

アブドルアジズはイブラヒムの勧めた石油先物取引については応じるとも応じないとも一切言わなかったが、イブラヒムはアブドルアジズとのこれまでの付き合いで結果は判っていた。

後で一〇〇万ドル単位の巨額な金額がイブラヒムの口座に振り込まれてくるに違いない。